

(様式2)

学校関係者評価報告書

愛媛県立しげのぶ特別支援学校

学校番号 (50)

評価実施日		令和7年3月5日(水)	
委員	氏名	所属等	備考
	大野 裕介	障害者支援施設「三恵ホーム」施設長 (学校評議員・学校関係者評価委員)	
	山本 太平	松山城山ライオンズクラブ会員 (学校評議員・学校関係者評価委員)	
	若本 裕之	愛媛県立子ども療育センター所長 (学校評議員・学校関係者評価委員)	
	本田 隆彦	東温市教育委員会教育委員 (学校評議員・学校関係者評価委員)	
	岡田 翔揮	相談支援事業所「ソレイユ」管理者兼相談支援専門員 (学校評議員・学校関係者評価委員)	
	宮岡 宏太	愛媛県立しげのぶ特別支援学校PTA会長 (学校関係者評価委員)	
	西村希和子	愛媛県立子ども療育センター看護部長 (学校関係者評価委員)	
	豊田 純子	愛媛県立子ども療育センター生活指導担当係長 (学校関係者評価委員)	

評価・提言等	提言等に対する改善方策等
<p>1 明るく楽しい学校にします。</p> <ul style="list-style-type: none"> 学習発表会や卒業式に参加させていただき、一人一人を大切に児童生徒に寄り添い、力を引き出すような支援や配慮から、子どもへの愛情、教師としての使命感の強さを感じた。日頃から地道に実践に取り組みられている成果だと思うので、自信を持って評価しても良い。 いろいろな場面でICT機器の活用が見られる。学習ツールやコミュニケーション手段としての取組を継続するとともに、学校に在籍する児童生徒の特性への配慮を考えたときに、アバターを活用するなど活動の代替としての使用を検討してみてもどうか。 ICT教育の活用成果は未来を拓く大きな力となっていると感じるため、その道筋をつくっていくことが求められる。 <p>2 一人一人が主体的に学べる学校にします。</p> <ul style="list-style-type: none"> 児童生徒一人一人のICT機器の活用に関して、ICT教育については、かなり速いスピードで変わり続けているため、ICTやシステムに特化した外部講師に依頼して、イベント的な取組ではなく、通常の学習の中に入れていただき、指導助言等してもらえるようにしてはどうか。多岐に渡り様々な場面で外部協力依頼を行っていくことで教育活動や進路等、充実していくのではないと思う。 オンラインでの学習を含む様々な形態での学習活動の実施は様々な実態の児童生徒が在籍する学校においては特に意義がある。スヌーズレンルームの設置についても効果が期待されるため、常設できるとよい。 <p>3 安心・安全に学べる学校にします。</p> <ul style="list-style-type: none"> 特別支援学校に入学する児童生徒の保護者にとっては、早い時期から進路のことを気にしている。そのことが進路に関する項目の評価が低い原因ではないか。大きな会だけではなく、小さな会をこまめに開催して、情報提供をしたり保護者の悩みに対応したりする機会を設けてはどうか。 <p>4 保護者・地域から信頼される学校にします。</p> <ul style="list-style-type: none"> 教育相談も含め、実績もありセンター的機能の役割を果たしていると感じる。地域の中で当たり前センターとして機能することでインクルーシブ教育が進んでいくと思う。 使い慣れている学校からは積極的に依頼があると思うので、今後、様々なところが依頼できるように、周知方法やそれに対応する体制が構築されるとよい。 専門性についての項目が低下しているという結果だが、教職員のみなさんが専門性を高める努力をされていることは分かっている。保護者との対話の機会や実際の様子を見ていただく機会、また、写真や映像等を活用して知らせていく機会を増やしていくことが必要である。 <p>5 業務・改善</p> <ul style="list-style-type: none"> 少しでも改善を実感できていることは良いことである。児童生徒のことを思えば、教材研究や教具の作成等に時間が掛かるのは仕方ないことだが、子どものため以外の業務については、今後もICTの活用等により省力化を図っていくことが望ましい。 	<ul style="list-style-type: none"> 各種行事の実施に当たっては、関係各所と綿密に連絡を取り合い、情報共有を行いながら進め、充実した教育活動となるよう努めるとともに、児童生徒会の活動が活性化していくよう時間や場の設定をする。 全児童生徒が学校での活動に積極的に参加し、楽しめるよう企画したり準備をしたりする。 eスポーツをはじめとする各種課外活動を充実させるとともに他校との交流の場を積極的に設けて活動内容を深める。 オンラインを活用した疑似的な体験学習と実際の体験学習を関連させるなどの工夫をしながら、児童生徒の経験や知識が広がるよう努める。 ICTを使った就労が全国的にも増えているため、オンライン上での仕事につながるよう、外部機関と連携しながら情報収集をし、実践につながるよう努める。 個々の教員のICT機器についてのレベルアップにつなげるために、全体研修に加えて、個人レベルでスキルの高い教員の知識や情報を校内で共有するなど校内の人的資源を活用する。また、総合教育センターの研修講座の活用等、外部講師を活用するとともに、ICT機器に関する相談等を日常的に対応できる仕組みを検討していく。 児童生徒が興味・関心を持ち、主体的に学習に取り組むよう、ICT機器を用いた様々な学習形態や学習内容の情報収集に努め、学習の機会の拡大を図る。スヌーズレンなど児童生徒にとって効果的な活動について校内で実施方法や教具等を共有して取り組み、児童生徒の心身の安定、発達につながるよう工夫する。 的確な進路情報を提供したり、進路相談に対応したりするために、関係機関や事業所とのつながりを深めるとともに、校内で進路指導に関する情報を共有する。 本人や保護者の希望に応じたアセスメントや情報提供、進路に関わる連携などの充実が図れるよう、機会を捉えて外部専門家等の関係者と連携し、進路実現につなげる。 市町の教育支援委員会や教育相談会などの機会を捉え、地域で学ぶ肢体不自由児や病弱児の把握に努めると共に、本校のセンター的機能支援事業を積極的に紹介する。 学校ホームページに学習活動の様子を知らせるだけでなく、教職員が専門性を高めるために取り組んでいることを発信するツールとしても活用していく。 紙面での情報提供に加えてホームページを積極的に活用し、幅広く、また最新の情報の提供を行う。 研修会での学びを生かし、児童生徒・保護者に専門性を還元できるように努める。具体的に児童生徒を支援・指導する実践場面について対応できるよう、様々な研修スタイルを工夫し、積極的に情報提供ができるようにする。 アンケートの紙面実施などを含め、ペーパーレスへの取組、ICTを生かした方法について周知していく。 書面やオンラインでの会議の実施を積極的に活用するが、協議内容に応じて対面で協議できる場を設けて、校内課題の共有、解決に向けて取り組む。